

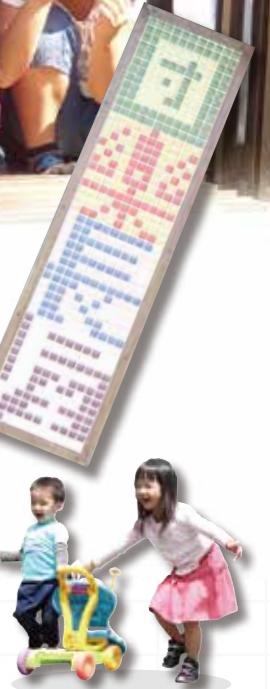


# 卷頭特集

子どもたちが  
笑みながら成長できる  
**家**がある

# だんらんながや 団欒長屋 プロジェクト

いつも子どもたちの笑い声が絶えない  
『団欒長屋』は、保育所や学童保育を営み、  
時にはママたちの憩いの場にもなる。  
レトロな一軒家で、地域で暮らす様々な  
年代が集う子育て交流スペースだ。



「多世代でつながる子育て  
空間」ができたきっかけ

# 働くママや育児に悩める 人たちをサポートし続ける

新聞制作に関わる「子ども記者」たちで決める。取材は子どもならではの質問が飛び出し、引率のボランティアスタッフたちはヒヤヒヤ。でも取材を受けるみなさんは温かく答えてくれる。製本や配布も子どもたち自身で行う。以前、出来上がった新聞を100部持ち帰り、駅前で手配りした子もいたそうだ。自ら発信し、表現したもののが形になつた喜びはひとしおだったに違いない。



地域の人たちを取材して  
みんなで作る新聞

2011年、プロジェクトを  
自分たちで考え、  
自分で決めて、  
自分でやる。

今月から、『だんらんしんぶん』11号の制作準備に取り掛かる。同紙は「とよなか夢基金」の助成事業として創刊。「大人が読んでも面白い学級新聞」がコンセプトだ。記事には地域のお店紹介や地元の方へのインタビュー、イラストや漫画など内容盛りだくさん。ママたちも、各々の得意分野を活かして、編集をサポートする」とも。家族一緒に楽しめるのが、『団欒長屋』の良いところ。

ミーティングでは構成や取材先、またカメラマン、似顔絵描きなどの役割を、新聞制作に関わる「子ども記者」たちで決める。取材は子どもならではの質問が飛び出し、引率のボランティアスタッフたちはヒヤヒヤ。でも取材を受けるみなさんは温かく答えてくれる。製本や配布も子どもたち自身で行う。以前、出来上がった新聞を100部持ち帰り、駅前で手配りした子もいたそうだ。自ら発信し、表現したもののが形になつた喜びはひとしおだったに

「んでした」と当時を振り返る。  
この経験を機に、頼れる人が近くにおらず、預け先や育児の悩みを一人で抱えるママたちが安心できる場を作ろうと、2013年、プロジェクトを立ち上げた。

一昔前の子育て環境には、『向いの三軒両隣、困ったことがあつたらお互い様』といつ、「近所同士が助け合う関係」が当たり前になっていた。「私は、隣近所の人たちに、温かく、時には叱られながら、下町で育ちました。そんなふうに人の子も自分の子も地域みんなで見守り、育てていく『長屋暮らし』のようなイメージで、この昔ながらのおばあちゃんのおうちみたいな場所を選んだんです」と話すのは、乳幼児保育や学童保育を行う『因縁長屋プロジェクト』の代表、渕上桃子さん。

渕上さんはシングルマザー。現在小学1年生になる女の子がいる。「6年前に豊中へ越してきたばかりの頃は、生活のために、仕事と子どもの預け先を探すべく往復の日々。娘にはもっとたくさんの大人と接して、いろいろな価値観を身につけて欲しいと思っていたけれど、地域

た趣味や、おしゃべりなど週ごろの方は様々。定期的にベビーマッサージのイベントも行っている。『ホームサポーター』では、各家庭に赴き、簡単な家事やベビーシッター業務を引き受けている。どちらの取り組みも、育児に追われるママたちが息抜きできるひと時を提供している。「何もかもお母さんが一手に引き受けず、どんどん家庭の敷居を下げてほしい」と渕上さんは話す。今後は「はぐくみホーム」という里親制度にも参加し、さらには認可保育所の設立を目指すという。

なぜこんなにもバイタリティに満ちた行動が次々に起こせるのか。「苦労が苦労じゃないんですよ。すべて報われる大変さなんです」。取材中、一番印象に残った言葉だ。

これから季節はイベントが目白押し。去年は流しそうめんやスイカ割り、キャンプ、ピールなどを地元の人たちや、ボランティアに来てくれた『大阪府立豊中高校』の生徒たちと楽しんだ。大人も子どもも笑顔になれる『団欒長屋』。そこは、育児を頑張るママたちに優しく寄り添う子育て空間だ。

が「赤ちゃん、かわいいね」と年上にらしく優しく接する光景も。土曜日は、朝8時前に来て、開園を待ちわびる子もいる。「ボランティアスタッフの学生も一緒に開園を待っていることもありますよ」と渕上さんは笑顔で話す。

スタッフには上海からの留学生もいて、昼食に彼が郷土料理を作ったり、その後は子どもたちと百人一首で遊ぶことも。普段の何気ない生活の中で、異文化交流が生まれている。また、「」で出会ったスタッフ同士が結婚した時は、子どもたち手作りの「披露パーティー」が行われた。大好きなふたりのために、飾りつけや余興など、全部子どもたちが発案し進行。泣いて笑って、みんなの思い出に残る1日に。「」の仕事をやってよかつたなと思う瞬間ですよ」と本当に嬉しそうに話してくれた。

何かをする時は、子どもの自主性に任せることを心がけている渕上さん。豊中産のレモンでレモネードを作つて売る体験学習「豊中レモネード」では、収益の半分は頑張った子どもたち自身の「給料」に、そしてもう半分は「団欒長屋」へ贈られた。その使い道も自分たちで考えさせた結果、赤ちゃんから小学生までが遊べるハンモックを購入。このような話し合いの中で、自分の意見を主張しつつ、人の意見も受け入れる力が自然とつく。

代表  
渕上 桃子さん

子どもたちから「モモ」と呼ばれる親しまれている。娘さんが仕事の一番の理解者だ。

**取材協力**

**団欒長屋プロジェクト**  
豊中市螢池西町 1-3-32

● アクセス  
阪急宝塚線、大阪モノレール  
「螢池駅」徒歩 5 分

● MAIL  
[danran.nagaya@gmail.com](mailto:danran.nagaya@gmail.com)

● H P  
<http://danran-nagaya.blogspot.jp>

**TEL. 06-6836-9011**